

An aerial photograph of a forest stream. The water is a deep, clear blue, reflecting the sky and the surrounding greenery. The stream flows through a dense forest of tall, thin trees. The banks are lined with large, flat stones, creating a natural-looking structure. The overall scene is peaceful and serene, capturing the beauty of a natural waterway in a forest.

あすふあるとソラ

makana

私の愛しい人は

もう、この世にはいない。

あの人以外、愛することが出来る人は

もう現れないと思っていた。

そして、狂う欲しいほどに相手の気持ちを知りたくなることも

誰かに抱きしめて欲しいと願うことも、もうないと思っていたのに・・・・・・・・・・。

雨がアスファルトに水溜りを残して行った。

私は、その水溜りに映る空にのってみたいくなる。

サンダルを脱いで、その水溜りに足を浸す。

温くまとわりついてくる水に足のつま先が掴まれる。

ゆっくりと　ゆっくりと

私は歩を進める。

普段はしない行動をすることで、何もかも忘れることができそうだ。



水溜りに浮かぶ空にのったはずなのに

歪んでしまった空は 生温く 私は 居心地が悪くて

その空から抜け出した。

上を見上げると、雨があがった空に、吸い込まれそうな青が

私をすくい上げてくれた。

『帰りたい』

どこか

ここじゃないどこかへ-----

初めて、心から求めたひとだった。

彼が話す言葉が私の聴覚に春風のように優しく響いていく。

彼が指差す、どれもが視覚をパッと明るく光射すかのように映し出す。

彼が抱きしめてくれたときの胸の中で埋めると、彼の匂いが私を安心させてくれた。

どれも、すべて、私の細胞にひとつ、ひとつ染み込んでいっている気がした。

そんな彼が私の前から何も言わずに、それは突然で、

私のすべてが無になったかのように、まるで音が消えたかのように・・・・・・・・。

彼だけが、私のすべてだったのに、これから二人で一緒に歩いていこうと

約束した矢先だったのに、私だけをポツリと残して、彼はある日突然

その存在が消えたのだ。

私の鼓動が停止してしまえばいいのにとさえ思った。

彼がいなくなった今

-----私は抜け殻だった。

そんなときだった

親友からの電話。

「帰っておいでよ。」

電話口から、優しい声が耳を伝って私を包んでくれる。

泣きそうになるのをぐっと堪えていると、

「泣いてもいいからさ、もう我慢せんでいいから、戻っておいで。」

その言葉を聞いたときに、我慢していたものが嗚咽と一緒に流れでて

凍ってしまった心が、少しずつ溶け出したような気がした。

止めていた私の中の時計の針が、また動き始めた気がした。

泣きじゃくる私の声が、落ち着くのを待っていてくれた彼女が

もう一度、優しく、

「帰っておいで。」

私は電話の相手には見えないだろうに、うん、うんと頷いていた。

知らない番号からの着信。

しばらく画面を見ていた。

鳴り止まないコール音。

「-----もしもし？」

少しの沈黙の後に、懐かしい聞き覚えのある声。

「-----俺だけど。」

すぐに誰だかわかったのに、

「誰？」

なんて聞き返すわたしは、意地っ張りだ。

こんなところでも、要らない意地が出てしまうのは、どうしたもんかと、

自分の性格が嫌になる。

「久しぶりだな。そういう、しらばっくれるの、相変わらずだな？バレバレだっつう一の。」

そして、そんな意地も電話の向こうの相手にはお見通しで・・・・・・・・。

「-----なっ、何よ！」

そんな私を

「番号、変わってなくてよかったよ・・・・・・・・元気だった？・・・・・・・・」

なだめるように、鼓膜に響いてく懐かしい声。

彼の声は、私が思う

優しい音楽に似ている。

そして、あの頃に気持ちが飛んでいく。

一瞬で、あのとき、砕けた心の細胞が沸々と再生していくみたいに、

灰色だった断片世界が一気に薄ピンク色に広がり始めようとする。

「-----なあ、もう一度やり直さないか？」

揺れそうな気持ちを、どうか止めてほしいと

いま、湧き上がってきた、すべてのものを制止するために

瞼をギュッと閉じて

「-----バカね。戻れるわけじゃない。」

気持ちとは反比例する瞼の裏の暖色に

ナキソウニナル

堪えるために

カーテン越しに空を見る。

蒼の空が清んでいる。

戻れない過去を懐かしんでいるだけだと、言い聞かせ

「-----それじゃ。」

の後に続く言葉がないことに

甦生されそうになった断片が

蒼の空に

瞳が溶けていく。



溜息の濃さが見えたなら

少しは 君の力になれたのかもしれないと

この寒空のしたで吐く息の白さが

空に昇っていくみたいに

少しは 君のことわかってあげれたのかもしれないと

あの空にどれだけの人の息が上がっていくのか

どれだけの想いが 入り混じるっているのか

あの蒼にすべて 吸い込まれてしまうのか



『溜息の数が多くなれば雲が多くなるんじゃないか』と君は悲しい顔で私に言ったんだ

『だから雲がなくなることはないんだ』と そんなふうにする君に

あの時気がついてあげていればよかったのかもしれない

溜息の色がわかるなら

君の心を 抱きしめてあげれたのかもしれない

今日も

痛いくらいに

切なくらいに

空に溶けていく



ガラスに沿って流れ下に落ちていく雨。

そのまま、アスファルトや土に染みこんで、その存在を隠そうとするかのように、

私のあなたに対する想いが気付かれない様に、内側に仕舞いこむ。

ガラスについている水滴を、そっと人差し指で掬い取る。

指に取った雫を口元まで持って行って、それにフツと息を吐くと、弾いて飛び散っていく。

いつしか、それは忘れた頃に蒸発してしまっているのだろう。

私の、この想いも、そんなふうに、蒸発してしまえば、いっそ楽なのにと

止まない雨をぼんやりと眺める。

傘の花が目の前を行き交って、その花たちは水を弾きながら水音を作り出しているに

違いない。

それは、きっと、うっとうしい雨音だと思えるかもしれないし、

救いの音に聴こえるかも知れない。

それも気持ち次第なんだろうと・・・・・・・・。

入り口から、彼は一緒に湿ったアスファルトに染み込んだ雨の匂いをつれて
やってくる。

ちゃんと言えるだろうか。

私、笑えているだろうか、

最後は、泣きたくないから、

私の代わりに泣いてくれるから、

こんな雨の日を選んだのだから。

しあわせはふつうでいい

何ひとつうまくいかないと思いながらも

こればかりは譲れないと思いながらも

それでも今日も歩いてる

息をして吐いて生きている

多分 そんなふうに ボクは 今日もただ何も掴めないまま

目を瞑る夜

幸せがなんだとか

不幸せがどうだとか

どれもが ぼんやりとした世界で

正解もなく

不正解もない

それでも朝には目が醒めれば

それは儲けもんだと

そう思えるのが

人生なんじゃないかと思えた

綺麗ごとを言ったって

逃げたって

結局は

最後は同じだと思ってしまうのは

それがいちばん

退屈で

それでいて

いちばん幸せなことなんかじゃないかと思えた



目を閉じて眠って

朝がきて起きる

それがいちばん

しあわせだということ。

僕は

死んだのだ。

ある夏の日だった。

どうしようもなく、僕には無力で、

震えて泣いているであろう背中を

抱きしめてあげることも、撫でてあげることも出来ずに、

ただ、彼女の震えて声を殺して泣いている後姿を、ただただ見守ることしか出来なかった。

蝉の鳴く声が、やけに耳に五月蠅く聞こえて、

夕暮れの影が畳に伸びていくのを、ただ暗闇が来るのを、影が暗闇で溶けて同化していくのを

僕は、見ていた。

きっと、この後、我にかえって、後ろを振り向いて僕の存在に気がついたときに

彼女はきっと痛々しいくらいの笑顔を僕にくれるだろう。

そんな彼女を置いていかねばならないなんて、そんなの酷すぎるじゃないか。

『神様

どうか

せめて

僕の存在がわからなくてもいい。

ずっと彼女を見守る存在でいたい。』

と願った。

その場を去ることも出来ず、彼女を支えてあげえることも出来ない僕の

今は、ただこうやって彼女を見守ってあげることしか出来ないのだから。

振り向いた彼女は、やっぱり痛々しいくらいの笑顔を僕にくれた。

でも、ひとつだけ、違うのは

「どうしたの？きみはどこから来たの？」

僕を抱き上げ、その涙を僕に拭き取らせてくれたことだ。

暗闇に溶けるのでもなく、天に召されるのでもなく、

神様は

僕を『黒猫』にしてくれていたのだ。

そして、僕は今も尚、彼女の膝の上で見守りつづけている。

そんな彼女を僕は今も愛しく想うのだ。



揺れるのはカーテンだけじゃないと知った日

何気ない優しさをたくさんもらっていることを知った夜

私もお返しに愛をあげたくて夜が明けるのを待ちわびる朝

その気持ちが重なった時に頷いてもいいのかな

歩いていくこと決めてもいいのかな

部屋のなかに潰れてしまいそうなくらいのギュッと詰まった気持ちを

放出する勢いで窓を大きく開けて、つぶってた瞼を開ける

風が部屋の中に滑り込んでくる

カーテンが揺れる

うごいてるのだ

私の心も

動いているのだ

空を流れていく雲も

動いているのだ

なにもかもが動いている

だから



急いで

動いて

向かい風が追い風になった瞬間に

私の足は君のところへ走り出していた

この気持ちを早く伝えたくて歩いている歩幅を大きくして

そして気がいたら走ってたなんて

今だけの熱い気持ちだとしても

この湧き出る想いは今は止められないとわかっているから

少しでも

少しでも

早く君に会いに行つて

私の気持ちを

伝えてもいいのかな

そしたら

受け止めてくれる？

笑ってくれる？

手を広げて待っててくれる？

心の中で色んな想いがループする

けれどその想いは悪くない

何気ない優しさをたくさんもらっていることを知った夜

私もお返しに愛をあげたくて夜が明けるのを待ちわびる朝

重なる時に光も影も

愛しく感じることをできるとわかったのは

きみだったから

HAPPY BIRTHDAY

これからも よろしくね

伝えに行くから

動きだした気持ちは

もう止まらないから

何気ない優しさをたくさんもらっていることを知った夜

私もお返しに愛をあげたくて夜が明けるのを待ちわびる朝

吹き抜けていく風

私を横切る風は、どこまで吹いていくのだろうか。

あなたも、風のように急に心に触れては、掴みどころがなく去っていく。

今日だって、いきなり目の前に現れて、私の心をかきむしる。

せっかく、忘れてしまおうと蓋をした感情を、

かさぶたになったと思っていたところを、無理やり剥がされたような、

あなたは、私のこんな心を知らずに、向日葵みたいな笑顔を私にくれる。

いつだってそう、

人生のおおきな階段をあがるたびに、一段抜かし、二段抜かしを、大股で

上がっていくのに、私は、あなたの背中をいつも見ているだけで、どんなに大股で

上がろうと思っても、いそいそでも追いつきはしないの。

あなたは振り返りもせずに、前へ行く。

それでも-----

いつだって私の心にはあなたはいるのだ。

忘れようとしても、ほかの人がそばにいても、

あなた以上の人に巡り会えないとわかっているから。

いっそのこと、全然知らないひとだったらと、

出会わなければよかったのにとさえも思えてくるの。

ああ、今もこの瞬間も、ホラ、私の心を

刹那

君へと飛んでいく。

私はいつだって

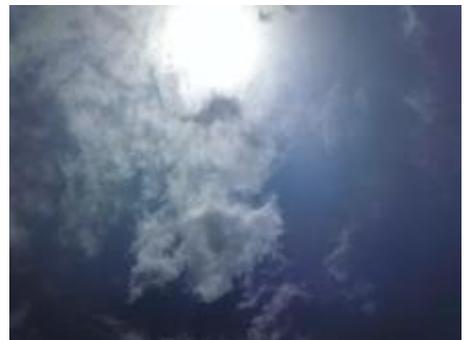
あなたに心を-----

風がとどまらないように君もまたどこかへ行くってわかっているのに

今、この目の前にいるという瞬間だけは-----

『

』 欲しいのだ



時間が

君が

すべてが

どれも

全部

あてはめては

かき消すの

君自体が

幻だったのかとさえも思えてくる

私は狂っているのかもしれない

君に心かき乱され　　私は私じゃなくなるの。

こんなに心は、君に持っていかれているのに、

吹き抜けていく風

そして、前よりも増して、傷が大きくなって

私は、無理にまた蓋をする。

私の心は

いつも、

今も、君に-----

僕はずっとここにいる

想像する。

思い切り、とてつもなく、ワケのわからないことで。

この世の終を。

でも、それでも最後まで僕は

君と一緒にいようと思う。

僕はずっと君の隣にいるはずだ。

そう言って君にプロポーズした。



そしたら、君は

ただ、笑ってた。

僕らしいって

君は笑った。

僕はずっと君の隣で

笑って、泣いて、怒って

人生最後まで楽しむよ。

そう答えたら

じゃあ、私もって君は笑った。

少し強気になった僕は

絵の具の筆を持って悲しみなんかは塗りたくって

なくしてやるから大丈夫だ

そう言ったら

君は笑って

じゃあ、絵の具を絞る人に私はなってあげると

言ってくれた。

青空色の絵の具にしようと言おう。

僕もそれがいいと頷いた。

そんな とてつもなく ワケのわからない

そんな物語を語れる君と僕は

ずっと二人だ。

この突き抜ける青の下で誓う。

青空に捧ぐ、君への愛。

朝が一番はやく明ける場所

暖色系の電球の下で並べられる

さっきまで、あの広い海の中で泳いでいたであろう魚たち。

濁りのない眼球は新鮮さの証。

氷の布団に敷き詰められた銀色に光り輝くその身体を

だみ声のなか競り落とされていく

くわえ煙草で颯爽と歩くぬれたコンクリートの上

魚たちは行き先を決められて卸されていく

命の終わりと命の始まり



まだ夜が明けぬ街の中で一番早く活気づく場所で

明けていく空を見る

朝日を浴びるのは一仕事終えた後

-----そんな朝が始まる場所

寒空に青白く光る月を見上げながら雪を踏みしめながら歩く。

後ろを振り返ると、歩いてきた足の跡が行進しているかのように続いている。

最後に見た彼の寝顔を思い出して、あの時、窓からみた月と同じはずなのに

こんなに凍って見えるのは何故なんだろう。

漆黒の闇の中、目を覚ました私は隣で寝ているであろう人の存在を確かめたくて

手が空をさまよう。

その相手を確認すると、私はその存在に近寄っていく。

無意識なのか、寝ぼけているのか、彼は私をすっぽりとその腕の中に抱き込んでくれる。

でも、私は息苦しくて、モゾモゾと息がしやすい方へ顔を向ける。

気持ちよさげな寝息と私の呼吸とを合わせてみたくなる。

そんなことをしていると、次第に眠気はなくなって、暗闇の中で独りぼっちのような気がしてくる。

さっきまで、二人のためにシーツが波のようにゆれていたのに、

今は深く海の底に沈むかのようにすっぽりと包み込んでくれている。

このせまいベッドが海ならば、私は泳ぎが下手な魚なのかもしれないとぼんやり

考える。

今も、呼吸がうまくできていないもの。

彼はなんだろう、イルカみたいだなと思ってクスリと笑いが込み上げてくる。

暗闇に慣れてきた目は一筋の光を見つけた。

この暗闇では少しの光が道しるべのようにさえ感じてしまう。

きちんと閉められなかったカーテンの隙間からはいりこむ青い光の筋は

今日の空に浮かぶ月の光。

それは冷たく鋭く、きっと海のそこ深くまでも続く筋になるはずだと

思う。

どこまでも冷たく青白いその光に震える闇の中。

その光を私は蜘蛛の糸のようだとも思う。

その光の糸をたどれば、答えが見つかるのではないかとさえ思うから。

この今の瞬間は、今しかなくて、明日には存在しない時間。

この光も、あの空に浮かんでいる月さえも

明日の今頃にはあるのかもしれない、それともないのかもしれない

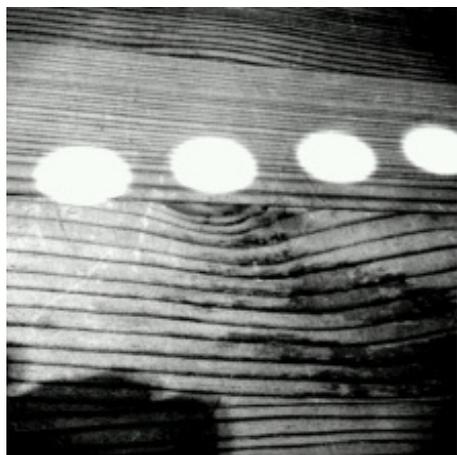
今あるものがあるというのは奇跡に近いのだから。

私は冷たい凍るような空気を吸い込みながら、サクサクと雪を踏みしめる。

あの青白い光が真っ白な雪道を照らすから。

最後に見た彼を忘れるために私はその寒さに抱かれながら

震える月に手を伸ばす。



砂の城

それは綺麗なようで、本当はすごく残酷なものじゃないのかと思ったの

出来上がったときはすごく嬉しくて誇らしいのに、月日が流れると

それは色褪せて、目にも留められなくなってそして風化していくようで

私には、それは幼い頃に作った砂の城のようにさえ感じる

ほら、気がついたら、風に吹かれて少しずつサラサラと崩れていく

いつしかそこには、そんなものがあつたのか、なかつたのか、人の記憶にも

残らないような曖昧さで消えていく

きっとそうやって、ゆっくりと私の人生も流れていく

今そこにある幸せも温かさも抱きしめられる喜びも

いつかは、そんなことあつたのか、なかつたのか

そんなふうに瞬いた一瞬の出来事だったかのような



だから風が吹くたびに抱きしめたくなる

両手を広げて受け止めたくなる

それもまた瞬きの一瞬の時だったかのように

ゆっくりと ゆっくりと

それは消えていく

それはどこへ行くのか 帰るのか

それは砂の城のように

朽ち果てるのかと思わせるから

今日も今も私はしっかりと立ち尽くそう

-----生かされていると思う証

コーヒーのおかわりいかがですか？

毎日、同じ時間にやってきて、同じ場所に座る彼を最近私は密かに心待ちにしている。

窓際の端のひとめが気にならない場所に一冊の本をカバンから出して

時間を潰すのでもなく誰かと待ち合わせしているのでもなく、

ただコーヒーを一口飲んで本に視線を落としたり、

たまに窓の外をぼんやり眺めたりしてその場所に座っている。



おかわりのコーヒーは無料なので勧めに行くと

「お願いします。」といってコーヒーをもらう日もあれば

「いいです。」といっておかわりしない日もある。

それでも、その後には必ず

「ありがとう」というお礼も忘れずに言ってくれる。

私は、その会話にもならない、一言、二言を交わすことを楽しみにしているのかも知れない。

あの人に「ありがとう」と言われると、なんだかすごく良いことをしたような気分に

なる。

仕事なのにと自分では思うのに、そういうふうに思わないのはあの人の

雰囲気だからなのでしょうか・・・・・・・・・・。

あの日もそう、

いつものようにあの窓際に座って外に視線を落として

その視線がしばらく戻ってこないことに不思議に思い、何を見ているのか気になって

こっそりと私も見てみる。

そこには、さっき通り雨で出来た水溜り。

その水溜りにうつる空を見ているのだろうか・・・・・・・・・・

それとも、その水溜りを超えようと競い合っているやんちゃな小学生のその

行動を見ているのか・・・・・・・・・・。

彼の視線をたどると、どうやらそうではないことに気がついた。

彼の視線はそれを通り越してもう少し先にある。

道路をはさんだ向かい側のバス停

一人の女性が紺色の水玉の傘を持って立っていた。

彼はその人を見ていたのだ。

彼女も彼に気がついたようで、手を振っている。

彼は手を振らずに手を上げるだけの仕草をして彼女をみつめる。

．．．．． どういう関係なんだろう。

バスが来て乗り込む。

走り去るバスを見送ると、彼はやっと視線を本に落とす。

もしかしたら、毎日同じ時間に来て同じ場所に座るのは、彼女を見送っていたのではないか

そう思うと納得できる。

彼と彼女の関係はどんなものだろう。

あれからも彼はいつも同じ場所、同じ時間、同じ注文をして

あの席に座る。

窓の外を眺めているとき、やっぱりあの女性がいた。

「コーヒーのおかわりいかがですか？」

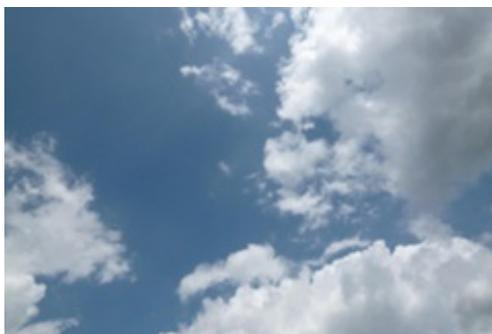
と尋ねるかのように彼に尋ねてみようか．．．．．

—————「お知り合いですか？」

小さなアパートの窓。

寝転んで見ると、空がよく見えた。

今日は風が強いのか白い雲が流れていくのが早い。



窓を開け放し、覚えたてのメンソールの煙草に火をつけて、肺に深く吸い込んで

吐き出すと、窓の外へ流れていく。

「オレ、煙草嫌いなの知ってるだろ？」

「なんで？別に自分も吸ってるんだから、女が吸うのが駄目っていうの偏見じゃない？」

「そうかな・・・・・・・・」

「そうだよ。」

どうせキスしたときに交じり合えば、どちらかのものかわからなくなるのに

そんなことを気にしてるなんて・・・・・・・・

何もしない休日の午後は、二人でゴロゴロとしているうちに、いつの間にか

夕方になり、夜になる。

気の持ちようで、24時間が短く感じたり、長く感じたり、不思議なものだ。

ただ、こうやって何もしなくて二人だけの時間を過ごすのがこんなにも贅沢な時間だったなんて

後になって気がつくというものだ。

目を閉じれば、あの時の時間が流れ出す。

背中を向けて咳ばらいするときのオト。

すごく嬉しそうに目を細めて笑う顔だったり、

雑誌なんか読んでいるときなんて後ろからギュッとまわり込んで抱きしめてくれた腕。

遅い帰りをベッドの中で待ってたら、その気配に気がついて

「こっちくる？」て缶ビールを見せて、一緒に飲もうよとアピールする姿に

嬉しくて二つ返事で飛び起きる。

どれもが、普通で、どこにでも転がっていそうな、そんな毎日だったのに。

「俺さ、戻るんだ。」

「えっ・・・・・・・・」

「参ったよな、季節はずれの移動ってどうよ？」

動揺しないように、なるべく普通に問いかける。

「なんか、ミスとかしたの？」

「ん～・・・・・・・・全然、思い当たることなし。」

「じゃあなんで？」

「・・・・・・・・さあね、なんか俺ってさ周りから浮いてるみたいだから、厄介払いしたかったんじゃ

ねえの？」

そういうと、胸ポケットから煙草を出して、ライターで火をつける。

そのいつもの煙草を吸う動作を黙ってみている。

フウッと天井に向けて吐き出した後に、そのまま弱気な言葉も

出てしまったようで、

「・・・・・・・・参ったよ。」

はじめてみせる弱気な姿に私は後ろから抱きしめる。

静かに黙る私に

「泣いてるの？」

なんて聞くの。

あなたの声が背中から私の頬に響いてくる。

そっと私の腕を解いて、私の顔を覗き込む。

「あっ・・・・・・・・ヤッパリ泣いてる。」

親指の腹で、私の涙をぬぐいとってくれる。

唇に流れている涙は重ねる唇で受け止めてくれる。

「ねえ・・・・・・・・これで終わりにするの？」

「どうだろう・・・・・・・・」

「だって・・・・・・・・」

「そうだな・・・・・・・・。」

彼は帰っていくのだ。

家庭という巣の中へ

多分私はそれを知っていたはずなのに、

いつかはそうなることもわかっていたはずなのに・・・・・・・・。

行かないでなんて言える筈もなく、お互いにそうなる結末だとわかっている

言われなくてもわかっている。

手に入らないとわかっているからこそ、この想いは強くなる。

そして彼が部屋から出て行く。

私は寝たふりをして彼の気配を感じ取る。

そっと私の頭を撫でてキスを落として

「さよなら」と小さく

それは

「愛してる」のように聞こえる

玄関の扉が冷たく閉まるのを、布団にくるまりながら目を閉じて聞いた。

あれから、忘れるのに必死だったのに、

今はそれもヒトツの想いだったと・・・・・・・・。

別に忘れなくてもいいんだ。

あれも私が愛した形なのだから。

煙草の煙が窓の外にあの日のように吸い込まれて風に吹き飛ばされていく。

今日も私は窓を開けて寝転びながら、ここから空を見る。

あのときのように、流れていく雲の早さを感じながら。

朝の目玉焼き

カーテンの隙間から光が差し込む。

部屋の扉を開けると、コーヒーの香ばしい匂いと朝の音。

いつもの朝のテレビ番組、リズムカルに何かを切る包丁の音が普通は心地好いのだろう。

でも私には反比例するかのように気持ちは重たいものになる。

朝の食卓に出された目玉焼きは太陽のようで。



私は目の前にある目玉焼きが眩しいもののように感じて、思わず、黄身の部分をフォークで

グチャッとつぶす。

私にはちっとも輝かしい朝じゃないのにと・・・・・・・・。

いつからだろうか、目玉焼きを見るとうんざりとした気持ちになってきたのは・・・・・・・・。

毎日、私が叫びだしたい気持ちを無理に抑えて、今日も満員バスに乗り込み、

征服という名の制服に身を包んだような、罪人のような暗い気持ちで、学校に通うのだ。

母も、父も私の気持ちを知りながらも、見てみぬふりをするのだ。

学校の校門には、そろそろと吸い込まれるように入っていく。

私はそのなかの一員になるのがすごく嫌だった。

なんとか、その波に逆らって一人だけ違う方向に歩いていく。

そうすると、視線が絡みつく。

同じことをしない私に絡みつく視線は鉛のように重たく私を縛り付ける。

でももうすぐこれからも解放される。

卒業という名の紙切れ一枚で私は自由になれるんだ。

すぐ手の届く場所にいる距離にいるはずなのに、どうしてこんなにも遠く心が感じるのだろう。

擦れ違った瞬間から手を繋ぐのを躊躇って、あなたの心が見えなくなって、

早く私の気持ちに気がついて欲しくて、地面に映ったあなたの手の影を自分の手と重ねてみる。

少しだけ不安に思っている気持ちを掻き消そうとした自分の行動に、どれだけ余裕がないんだろうと

焦りをはじめて感じた。

先に歩き始めて行く彼の後ろを私は追いかけるように歩く。

彼の背中からは優しさなんて感じられない。

昔のように手を繋いでくれることも、私のことを気にかけて後ろを振り返ってくれることも。

わかんないでしょ？

私が今、泣いていることも。

声を殺して、頬をぬぐったことも。

少しだけ不安に思っていた気持ちが、どんどん、重なってそれが現実となっていく。

また、流れそうな涙を堪えるために、上を見る。



空が真っ青で、綺麗だと思った。

ああ、私、下ばかり見てて、空なんて見てなかった。

随分勿体無い時間を過ごしてきたんじゃないかと彼の背中を見ながら考える。

賭けをしよう。

もし、目的地まで彼が一度も振りかえらなかつたら、終わりにしよう。

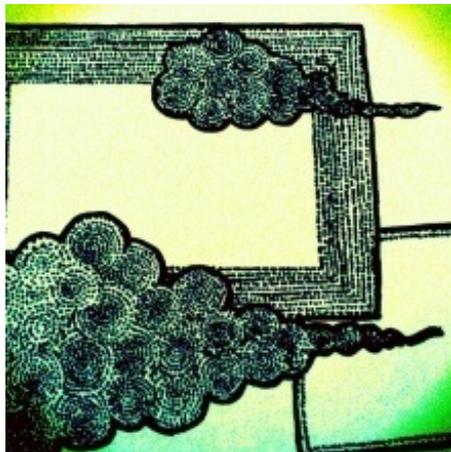
もし、一度でも振り返ることがあったのなら、そのときは-----

夜、布団に潜り目を瞑る。

瞼の裏側を見るように閉じていると、暗闇が深くなってきて、空間が広がったように感じる。

空ができあがるような、宇宙がひろがるような、そんな感覚ができて私は嬉しくなる。

まるで寝転んで星空のない夜空をみあげているような感覚に近い。



幼い頃からそう、その瞼の裏の夜空を作り上げると安心してた。

どこまでも広がる空のように。

そこには風もなく、音もなく、ただあるのは、寝転んでいる自分とどこまでも広がる星のない夜空。

暗闇しか広がらないから、不安になるかと思うのに、何故か、

不思議と落ち着いて、そのまま眠りにいざなってくれることを私は覚えた。

懐かしい感じもする。

もしかしたら生まれる前の命になる

そんな前に、自分が居た場所なのかも知れない。

ゆっくりと命が落とされるために待っていたような・・・・・・・・。

もしかしたら、羊水の中でジッと待っていたような、そんなふうに。

木漏れ日の詩

私は目を閉じる。

あなたのぬくもりに包まれながら、

瞼の裏で感じ取ることができる木漏れ日を、

愛しく感じながら、この時間が永遠に続くことを心から願う、

そんな私は-----

雨宿りしていた軒下で、あなたと出会った。

止みそうにない雨と、アスファルトに叩きつけられる音を一緒に

ただ最初は眺めていたね。

「寒いだろ？」

そう言われて目が会った瞬間-----

私はあなたの部屋に転がり込んだ。

ずっと、一人ぼっちだった私は、あなたの優しさに触れて、最初は戸惑いもしたけれど、

いつしか、その優しさが愛となっていった。

そんな私をあなたは邪険にしないで、いつも優しい眼差しをくれる。

「どうしたの？」

私はあなたの大きな手が大好きで、優しく触れてくれるたびに、私は愛しさのあまり目を閉じる。

下からあなたを見上げると、目を細めて笑ってくれるその瞳に、今はひとりぼっちじゃないと感じる。

そして私は、あなたに包まれる。

鼓動に耳をつけて、守られていると思う。

そして大きな腕の中で私を抱きしめてくれる。

嬉しくて、私は、あなたの鼻先に自分の鼻をくっつけると

あなたはくすぐったそうに笑ってくれる。

(大好き)

大きな声で私は伝わればいいのにと精一杯の声を出す。

でも、

あなたには伝わらない。

それでも、

お互いに居なくてはならない存在であるのは伝わってくるから。

「ニャ〜」

(大好き)

そう叫ぶ。

あなたは私を膝に乗せていつまでも、いつまでもなでてくれる。

だから私は目を閉じて眠ることができるのだ。

瞼を閉じても感じるができる木漏れ日に、

あなたとの時間を永遠に続けばいいのにと願う。

そんな、

あなたと私のささやかな昼下がりに。



パチン パチン と弾くような音。

陽だまりが出来てるベランダに足だけを出して器用に私は爪を切る。

その横で寝転んで重たそうに頭を左手で支え右手で本のページをめくる君が私のほうを
見ているのがわかる。

「・・・・・・・・なに？」



「ん～・・・・・・・・気持ち良さそうだなと思って。」

「えっ？わたし？」

「ちがうよ。爪が。」

「爪？」

「そっ、爪。」

変わったことをたまに言う彼は、また何か思い出したように私の爪が気持ち良さそうだなん
て

何を言い出すのか・・・・・・・・。

その話は軽く無視して私は立ち上がり、ガラスの扉を開けて、いろんな色がある中で

桜色を選んで、また元の場所に座りなおす。

私は手の爪には塗らない。

仕事柄、爪を伸ばすことも、マニキュアを塗ることも出来ずにいる。

別にそれは、それで不満はない。

足の爪に塗るのは隠れているから。

こっそりとした私の秘密のような気がするからだ。

母親の目を盗んで、こっそりと隠れて塗って、なんだかそれだけで自分が

大人の女性になったような気がしたあの幼かった頃の気持ちのような、

-----小さな秘密。

あとは

靴下だったり、ストッキングをぬぐと現れる鮮やかな色に自分が嬉しくなるからだ。

本当はネイルケアをした後に綺麗に塗るのがいいのだろうけれど、

私の場合、気にしない。本人がよければそれでいいの。だから大雑把でいいの。

そんな私の変な拘りは、

綺麗に塗るために息を深く吸い込んで一塗りするときには私の場合息を止める。

そうすることで集中する気持ちが高まるような気がしてくるし、

失敗しないで綺麗に塗れそうだと思うから。

「ニオイ大丈夫？」

「うん、平気。」

そういつてる彼の視線は本に戻ったようで、私も爪に集中する。

すべて塗り終わると、大仕事を終えたような達成されたような気持ちになる。

「ねえ、綺麗になったでしょ？」

ペディキュアを塗った爪を見せる。

「うん。この子はいいいね。」

足をこの子呼ばわりして、また変なことを言うなと思っていたら、

「足ってさ、全体重をのっけて歩いて踏ん張ってさ、文句言わないじゃない？

毎日、毎日、一番身体の中で頑張ってるのに、誰も褒めてあげないじゃない？

窮屈な靴履いたりしてても文句も言わないからね。だから、足の爪に色を塗ってあげるのって

ご褒美みたいなもんじゃないの？」

「ふうん・・・・・・・・ご褒美ね・・・・・・・・」

「あっ、でも、なんだ？違うな～、足が偉いんじゃないよ。足の裏が偉いんだよ。」

ブツブツとなにやら今自分が言ったことが間違いだったと言って

ペディキュアの話も足が偉いという話も結局は彼の中ではどうでもよくなったようだった。

シーツの波に彼の足と私の足が絡み合っけて溶けていく

なんとなく、いつもはそんなこと気にもしないのに、白いシーツの上の

桜色に目がいったのは彼がその指に

口付けを落としたから。

「やっぱり、この爪は偉いよ。こうやって君を愛しく思う気持ちをもっとくれるんだから。」

ああ、そうなんだ。あのとき私は何故この色を選んだのか・・・・・・・・

元気になるようなオレンジ色だとか、涼しげな水色、

血のような毒々しい赤色でも良かったような気がするけれど、

何故桜貝のような色にしたのか・・・・・・・・。

二人の甘味なときを邪魔しない色だから私は無意識にこの色を選んだのだ。

溶け込む朝

通勤時間。

職場までの通勤手段。

渋滞の道を避けながら自分だけの抜け道を探して走る。

カップホルダーには、朝自宅で準備してきたドリップ仕立てのコーヒーをセットして

お気に入りの音楽を流す。

外の世界と少しだけ遮断された小さな自分だけの空間。

そう、自分だけの世界。

車の窓から眺める街。

信号待ちをしている時に見る人々の流れを見るのが好きだ。

景色と溶け込む人の流れは、流れてく景色のように、まるで映画のワンシーンのようにさえ

感じる。

急ぎ足で歩いていくあの人の今日はどんな一日になるのだろうか。

自転車を漕いで行く学生の後ろ姿を微笑ましく思ったり。

目に止まった人の一日はどんなものだろうか、ほんの少しだけ考える。

この、時間が好きだ。

自分は、今から待ち構えている、うんざりする仕事量と一日の流れを考えると溜息が溢れるけれど、

この通勤時間のこの車の中での一人の時間が唯一自分という人間と向き合える空間のようにさえ感じる。

昨日はうまくいかなかった仕事も、今日はなんとかうまくすすめることができるだろうか。

昨日の残してあった難題ものを目を瞑って明日にしようとして残してきた。

今日はちゃんと向き合わないとダメだと思ったり。

少し気の合わない上司の顔がチラついて、自分から今日は笑顔で

挨拶してみようかと考えたりするのだ。

そんな勇気をもらえるのも、この車中から見える景色が、心の片隅に残っているから。

人それぞれの今日があって、その日の何かに向かっていく姿を見ると、苦しんでいるのは、自分だけじゃないと

そう思える。今そこを歩きながら、いそいでいる人たちにもそれぞれの何かがある。

そして、その人たちにも一日がある。

同じだけ与えられた時間をいろんな想いを抱えながら生きている。

「・・・・・・・・頑張ろ。」

そして、通り過ぎる背中に

「ファイト」

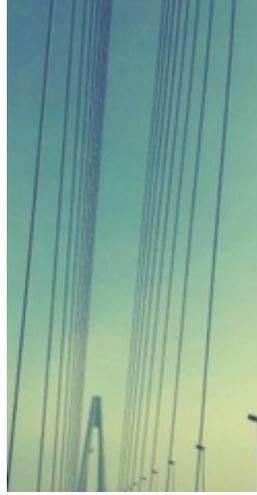
そう心でつぶやいてみる。

動き出す車と同時に、また気持ちを切り替える。

私の今日の始まりは、こうやって作られる。

加速するように、私の気持ちも一日のリズムに上手くのれる気がして

少しだけ音楽のボリュームをあげた。



つま先から春

この教室とも今日でお別れかと思うと、こみあげてくるものがある。

曖昧な季節の春から始まり、グルリとまわって一年が経つ。

ぎこちない始まりだった関係も、今じゃ当たり前のような会話が始まり、笑いあっている仲になっている。

休み時間になるたびに、窓際にたむろっていた場所も、今日でお別れかと思うと、少しだけ

特別な感情が湧いてくる。

埃を溜め込んだ、カーテンさえも・・・・・・・・。

「何してんの？」

後ろから、声がかかって振り返る。

「・・・・・・・・あっ」

「今日で、このクラスともお別れだな？」

「そうだね。」

「あっ、違うか？この学校ともお別れだ、だな？」

うなずきながら、わたしは笑う。

別に、おかしくも、なんともないけれど、この場は笑うのがいい。

そんなふうは何気ない笑顔を作ったときに、ほっぺをムギュッとつままれる。

「……いだ……い。」（痛い）

「お前は、おもしろくもないのに、笑うのやめろ。」

「……えっ？」

「愛想笑いっていうやつは、いつだってできるんだよ。お前には、楽しいとき、嬉しいとき、

素直に笑ってほしい。」

そういうと、ほっぺから、手を放して、真剣な目だけがわたしを捉えている。

「わかったか？」

わたしは、思わず縦にうなずくと、

「よし、良いコ，よい子。」

小さな子の頭を撫でるように、わたしの頭にも君の手が撫でてくれる。

「あっ、ついでに、言っておくけど？」

「-----何？」

「俺は、お前のことが好きだわ。」

突然のことに、目を丸くしていると、

「そこ、笑うところ。」

「あっ、うん。アハハ……」

「おまえな～、そこマジで笑うとへこむから。」

じゃあ、どうすればいいのよと思っていたら、

皆が、教室に入ってくる。

少しだけ、早まった鼓動が、おさまらずに、このドキドキをどうしたらいいのよ、と

チラリと見ると、笑った顔で

「後で！」

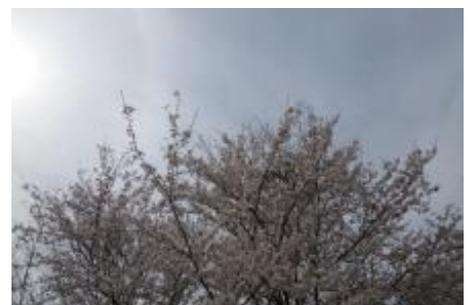
なんて、爽やかに去っていく。

式が終わった後に、わたしは、返事をしないとイケないらしい。

-----そんなの、決まってる。

わたしの春はもうすぐそこまで。

足のつま先辺りに来ている。



一粒の砂のように

一粒の雫のように

手のひらにのるくらいの

気持ちを

そっと

幾つしむように

言葉の一粒を

言霊の一粒を

ホロリ ホロリと

噛み締める

口の中

血の味がするのは

悔しさからなのか

愛しさからなのか

その血でさえも

一粒の糧として

生きるのだ

それが今

泣きたくなるよな

切なくなるよな

そんな青のせいなのか



やめてた

煙草を

肺深く

吸い込んで

吐き出した空に

白く広がる

溜息空



私は教室に揺らめく生き物のようなカーテンをぼんやりと見ている。

退屈な授業に、ジッと座っているだけの机の上で頬杖をつきながら、呪文のように聞こえる教師の声と、黒板に叩きつけられるような殴りつけられるようなチョークの音。

真剣に聞いているのか、いないのか・・・・・・・・。

クルッとまわすシャープペンシルに熱意を感じられない授業を受ける態度のあらわれ。

後、もう少しでチャイムが鳴るのを期待しながら見る時計の針が指すのは

-----14 : 45

まだ、終わらない授業の退屈さに自然と溜息が零れる。

こんなものに、役立つものが社会に出てあるのだろうか、こんなにジッと拘束されているような時間に

反吐が出そうになる。

外では忙しく時間が動いているのに、ここだけは時間が止められたような気がするのは私だけなんだ

ろうか・・・・・・・・・・？

ただ、ここで生があるのは、あの教師と、窓際のカーテンだけなのかもしれないと思う

そんな午後。

Your Eyes

雨が降っている。

惜しみもなく、ただ、下へ下へと流れるように、それは、地面に浸み込んでいく。

多分、もう少ししたら、この雨が雪に変わるだろうと、長年の経験からわかる感覚。

きっと、この地方ならではの、身についた習性のようなものに違いない。



ついさっき、コンビニで購入したビニールの傘を差しながら、私は歩いている。

透明の屋根が、雨を弾く音。

車が、走り抜けていくときに雨を巻き込んで、その水が歩道のほうに放出される。

それをまともに被った私は、もう傘を差している意味もないような気がしてきて

気持ちはうんざりとしてきたところだ。

それにくわえて、私の目の前を歩く、この人は、歩みも止めず、私を気にすることもせず、

目的地に時間通りに着くことだけを考えているに違いなかった。

「・・・・・・・・ねえ。」

小さな声で呼び止めようとするのに、雨音が邪魔をするのか、聴こえないのか、振り返りもしない。

もう一度、少し大きめな声で、

「ねえって！」

と呼びかけると、

面倒くさそうに、振り返ってその顔は、不機嫌そのもの。

「なに？」

「あのさ、今、車の水が跳ねてね--」

「ああ、急ごう。」

その後の言葉を言う前に、遮断される。

また、前を向いて、止まることも、気遣うことも、忘れてしまったかのように、

わたしの存在さえも、忘れてしまったかのように、もしかしたら、一人で、歩いてたんじゃないかと

思わせるくらいの、冷たい態度に、わたしの心が冷たくなる。

あなたの目に、映るのはわたしじゃないのかも知れないと、アスファルトに弾く水と

滲む視界と、透明な屋根から滴り落ちる雨の雫が混ざり合う。

あなたの目に映るのは、忙しく未来へ進もうとするものばかり。

振り返って、笑いかけてくれるだけで、それだけで、心の闇は溶けていくのに、

濡れてしまった涙の後も、なかったことに出来るのにと、

しみこんでいく肩先と、足元があなたの目に映るのでしょうか。

冬から春にかけての午後。

フと立ち止まって、

ゆるい時間を感じる。

厚い雲の隙間から糸が降りてきたような、そんな太陽のあたたかさに、思わず目を閉じる。

夏のジリジリとした焦がすような暑さじゃなく、じわじわと、ゆっくりと雪を溶かすような、

そんな眩しい陽の光に

暖色のやさしさを瞼の裏で感じ取る。



そんな、時を過ごしているときは、

時を知らせる時計でさえも、

視覚で感じるような

サラサラとしたに零れ落ちていく砂時計がいい。

非日常的な感じが良い。

そんな、緩やかな午後

考えるのはキミのこと。

春の訪れを待つように

空いている左手は、キミの手のひらを待っている。

曖昧な冬の午後

私の手のひらはキミの右手を心待ちにしている。

わたしのところがキミを待っている。

それは、

雪の下で、

土の下で、

芽吹く新しい季節を待つ

想いと似ている。